

II-7 木棺からみた湯舟坂2号墳

守田 悠

1. はじめに

湯舟坂2号墳は200点を超える土器の数々や、黄金に輝く双龍環頭大刀など豊富な副葬品をもち、一つ一つの歴史的価値はさることながら、石室内の空間がどのように使用され、どのような人物が葬られたのかを考えることのできる稀有な古墳である。この石室の一角からは、被葬者を納めた釘付式木棺に用いられたとみられる40点を超える鉄釘が出土している。古墳時代は時代や地域ごとに様々な棺が用いられ、古墳でおこなわれた葬送儀礼や被葬者の階層性の議論に一役買って来た。釘付式木棺は木材からなる棺の大部分は腐朽してしまうが、鉄釘に残る木質と出土位置から棺構造を復元する手法が確立している。本稿では湯舟坂2号墳に埋葬されていた釘付式木棺の復元例を提示し、丹後地域における釘付式木棺の中での位置づけについて検討する。

2. 湯舟坂2号墳の埋葬施設

湯舟坂2号墳は玄室床面積12.5㎡と丹後地域最大規模の石室をもつ。伯耆谷の古墳群の中では、約300m東に離れた山中に玄室床面積9.9㎡の須田平野古墳が存在するが、川上谷川流域において最大の埋葬施設を備えた古墳であることに変わりない。横穴式石室では同じ石室に何度も埋葬する追葬行為がしばしばおこなわれ、湯舟坂2号墳でも副葬品を片づけた形跡がみられることや、副葬品に年代幅があることから幾度かの追葬がおこなわれたことがわかっている(奥村編1983)。

図1は石室内の遺物出土状況を記録した平面図である。奥壁付近から金銅装双龍環頭大刀を含む刀剣類や大量の須恵器が折り重なって出土しているが、これらは新たな人物を埋葬する際に以前の埋葬の時副葬した器物を片づけたものである。盗掘の影響はほとんど受けていないと考えられ、最後の埋葬がおこなわれたその当時の配置がほぼそのまま、発掘調査によっ

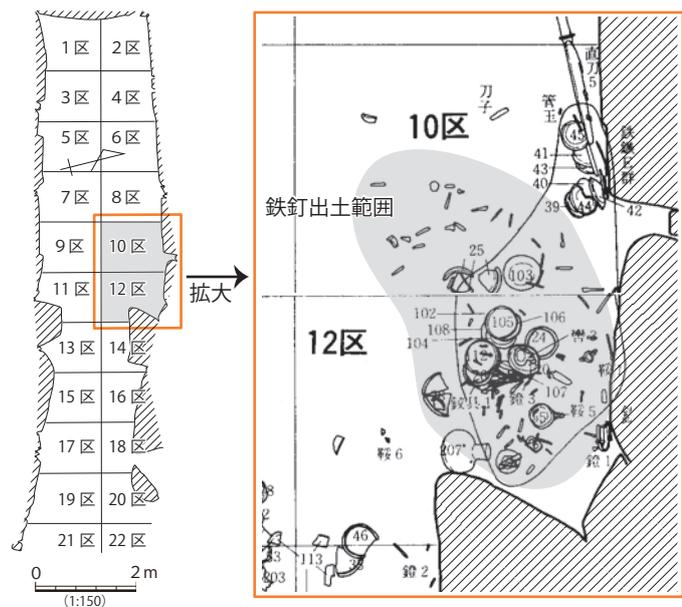


図1 湯舟坂2号墳平面図および鉄釘出土地区拡大図
(奥村編1983に加筆)

て明らかになったとみてよい。

3. 湯舟坂2号墳出土鉄釘と木棺

湯舟坂2号墳の石室が構築され、最初に葬られたのはおそらく金銅装双龍環頭大刀をもつ人物である。畿内ではこのような大型の石室の埋葬には組合式や刳抜式の重厚な石棺が採用される場合も多いが、湯舟坂2号墳では石棺の設置された形跡は見つかっておらず、埋葬に石棺は用いられなかったようだ。初葬者にどのような棺が用いられたのかは定かでないが、板材を組み合わせただけの箱形の木棺など、完全に有機質製の棺か、遺体を覆わない簡素な板材などであったと推定される（奥村編 1983）。

発掘成果の中で棺の存在を直接示す遺物が鉄釘である。古墳時代後期に入り、横穴式石室が畿内で広く築造されるようになるのと同時に、大和や河内を中心とした地域で釘付式木棺が用いられるようになる。なお、古墳時代の建物には基本的に釘を用いることはない。古墳から出土する鉄釘は渡来系遺物の一つであり、それをを用いた釘付式木棺は朝鮮半島、主に百済の墓制の影響を受けた棺形態とされてきた（岡林 2018）。導入初期の一部の古墳では鉄釘自体が30cm以上、棺材の厚さが10cmをこえる重厚なものもあるが、6世紀後半には釘の小型化が進み、棺自体も薄く軽いものに変化していくことが明らかになっている（瀬川 2005）。

湯舟坂2号墳の鉄釘はほとんどが10区、12区から出土している（図1）。石室のほとんどの遺物が片付けなどによる二次的移動を受けているとはいえ、ほぼ1×2mの範囲から集中して出土していることから、石室の玄室左袖部付近に釘付式木棺があったと考えてよいだろう。木棺の板材の部分は腐朽してしまっているものの、鉄釘の観察から木棺の姿をある程度復元することができる。発掘当時の報告書内で基本的な考察はなされているが、今回、新たに観察・整理をおこなったため、改めて報告する。

出土した鉄釘は、破片にして89点、頭部を数えると48点にのぼり、少なくともそれ以上の鉄釘があったとみられる。長さは最大8.5cmで、完形でも概ね6～8cmをはかるものが大多数である。頭部形態は打ち込む際の打撃によって変形しているもののすべて平面円形で、断面は鉤頭形を呈しており、平井分類の鉤頭式のうち円形鉤頭にあたる（平井 2021）。ほとんど

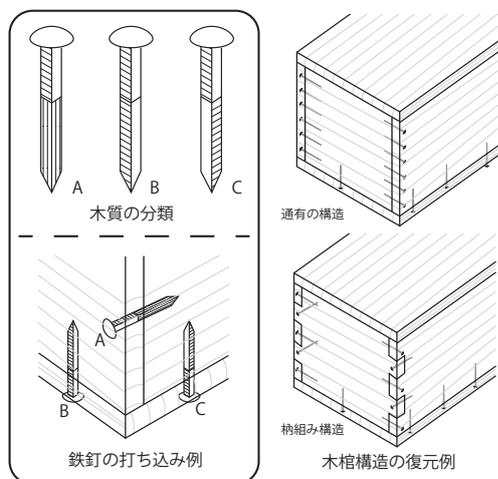


図2 釘付式木棺の復元

の鉄釘の身部表面には木棺材に由来する木質が残っており、付着パターンを分類することで鉄釘がどのように棺材に打ち付けられていたか、どの部位に何本の鉄釘が使われたかがわかり、棺構造を復元する手がかりとなる。木質を観察する限り、棺材の厚さは0.8cm～2cmの幅があり、0.8cm～1cmの一群、1.5cm前後の一群、1.8～2cmの一群に分けられる。一つの木棺の中で部材ごとに厚みが異なる例もあり、出土状況からみてもすべて一棺に用いられたものと考えられる。円形の頭部の直径がおおよそ1cm、身部の断面が一辺約0.5cmの正方形であることを踏まえると、か

なり薄い板材を丁寧に釘付けした精緻な作りの木棺である。

鉄釘に遺存した木質は板材に打ち込んだ方向から3種に分類できる(図3、表1)。棺の四隅を接合したA類は10区から14点、12区から11点とそれぞれの区で出土した鉄釘の半数を占めるのに対し、底や蓋の接合に関連するB類とC類は少なく、それほど強い構造ではなかったようだ。また、遺存する木質には製材した棺材の端面が残るのが10区から6点、12区から3点出土している。出土状況を重視すれば側板と小口板の接合部分が柄組みになった、より複雑な構造をしていた可能性も考えられる。

棺蓋については鉄釘の観察から復元することは難しい。類例もほとんどないため推測に留まるが、一般には白木の一枚板か、内側を削り抜いた印籠蓋が想定されている。

肉眼観察による限り、釘の頭部には漆塗りなどの痕跡はなく、白木の木棺に銀色の頭部が露出した姿であった可能性が高い。不明鉄製品として木質の付着したL字形に曲がった鉄製品(奥村編1983:第33図-3・4)、座金具と組み合う特殊な釘(奥村編1983:第33図-5)も報告されているが、正確な出土位置はわからず、釘以外にこの棺を装飾する金具があったかどうかは不明である。しかし、このような円形鋌頭の鉄釘で打ち付けた薄い木棺は6世紀末頃から大和を中心に各地で用いられており、単純

に頭部を折り曲げた鉄釘を使用する釘付式木棺と比較し釘付式木棺の中でも装飾性の強いものと考えられる。湯舟坂2号墳の鉄釘はA類が半数以上を占め、四隅角部に打ち込んだ鉄釘が圧倒的に多い。木棺の身ではなく蓋の構造に使われた可能性もあるが、どちらにしる木棺全体の構造的な強さよりも目に見える部分の装飾性を高めた棺であった可能性は高い。

円形鋌頭の鉄釘は大和、河内を中心にTK43型式期以降登場するとされる(平井2021)。左袖部(10区、12区)で出土した釘付式木棺の埋葬に伴うと考えられる須恵器は、TK43型式期からTK209型式期に比定されており、湯舟坂2号墳棺は円形鋌頭の鉄釘を採用する最初期の釘付式木棺の一つと考えられる。

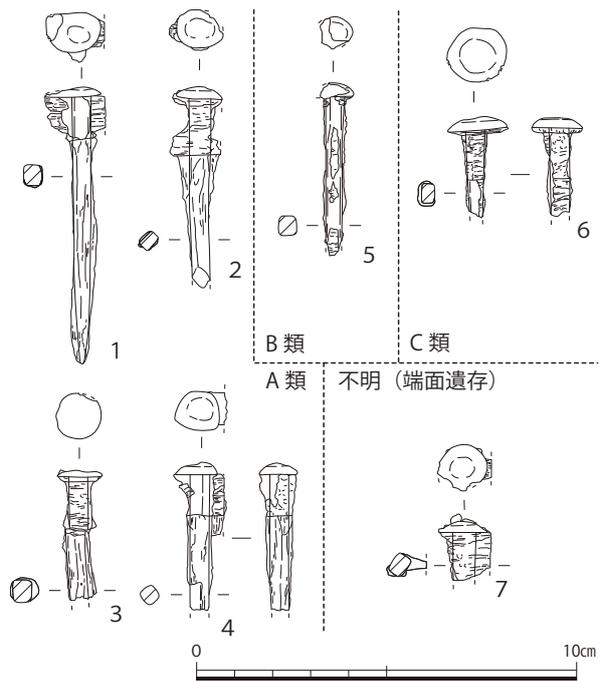


図3 湯舟坂2号墳出土鉄釘 (S=1/2)

表1 出土鉄釘の木質分類表

出土地区	木質分類	点数	材厚(cm)
6区	A	1	1.1
9区	A	1	1.4
10区	A	14	1.1~1.45
	B	3	2
	C	1	0.95
	不明	2	不明
12区	A	11	0.8~1.25
	B	5	0.85~1.25
	C	3	1~1.3
	不明	4	不明
不明	C	1	1.8
	不明	2	不明
合計		48	

4. 周辺地域における湯舟坂2号墳出土釘付式木棺

表2に丹後地域とその周辺で埋葬施設から鉄釘が出土した古墳を示した。遺存状態が比較的良好な事例として、高山12号墳、千原古墳があげられる。

高山12号墳は、京丹後市丹後町に所在する径18mの円墳である。玄室長5.7m、羨道長6.4mの右片袖式横穴式石室を持ち、墳丘は10数基から構成される高山古墳群の中で最大、石室は丹後地域の片袖式石室の中でも最大規模に位置づけられる。7世紀初頭に築造されてから最終の埋葬の後、盗掘にあっており、金銅装双龍環頭大刀をはじめとする複数回の埋葬に伴う豊富な副葬品が出土した。鉄釘は主に棺台と考えられる石材周辺と、玄門部中央、閉塞石中から出土している。1棺分の釘がまとまって出土した湯舟坂2号墳とは異なるが、金銅装双龍環頭大刀の柄頭も追葬に伴う片づけによって二次的に移動していると考えられ、釘も原位置を留めていないと考えられる⁽¹⁾。頭部が残存する釘は12点確認されており、いずれも円形鋌頭である。長さは完形のもので7.9～12.7cmをはかる。大半の表面に棺材に由来する木質が遺存し、確認できるものでは棺材厚は2.5～3.9cmである。遺存する木質はすべてA類で、棺の四隅を接合した釘である可能性が高い。報告では釘の全長の差から3個体の木棺があった可能性が示されているが(増田1988)、1つの木棺の中の釘の長さや、棺材の厚さにはしばしばある程度のばらつきがみられること、頭部形態が同じであることを鑑みれば一棺に用いられたと考えてよい。現在確認できる木質はすべてA類であることから、隅に5～7本の釘を打ち込んだ湯舟坂2号墳の木棺に似た、目に見える部分の装飾性を意識した棺であった可能性がある。高山12号墳は須恵器の年代から7世紀初頭の築造後、7世紀前半に複数回、7世紀末から8世紀初頭に最終の追葬がされたと考えられている(増田1988)。釘付式木棺がどの埋葬に伴うものかは定かでないが、石室の片づけの影響を受けていることから少なくとも最終的な埋葬に伴うものではない。

千原古墳は与謝野町(旧岩滝町)に所在する7世紀前葉に築造された一辺18mの方墳で、石室の残存長6.2m、奥壁幅2.1mの無袖あるいは片袖式の横穴式石室を主体部にもつ。奥壁付近から19点の鉄釘が出土し、円形鋌頭が6点、平井分類の折曲式が1点凶化されている。完形の鉄釘は13.0cmをはかる。棺材の正確な厚さは不明だが、釘の全長は高山12号墳とほぼ同じため、棺材厚も同じく2.5～4cmほどであった可能性がある。

丹後地域である程度の数の釘が確認できる古墳は少ないものの、周辺の丹波地域北部では6世紀末～7世紀初頭築造の弁財1号墳で円形鋌頭の鉄釘が3点、同時期の奉安塚古墳で円形鋌頭の鉄釘1点と折曲式の鉄釘2点、7世紀初頭築造の太田森2号墳で折曲式の鉄釘が16点出土している。但馬では兵庫県豊岡市城崎町所在の6世紀後葉に築造され7世紀前葉にかけて埋葬がおこなわれた二見谷1号墳、7世紀前葉の築造とみられる同4号墳で追葬棺に使用したと思われる円形鋌頭、折曲式の釘が出土している。出土状況の詳細が不明かつ断片的な資料ではあるが、丹後とその周辺では①15cm以下の短い釘を使用する、②おそらく7世紀代の埋葬に伴う、③棺材に薄い板を用いる、という3点が共通する。また、1つの釘付式木棺に使用する釘に対しては、円形鋌頭のみ、円形鋌頭と折曲式、折曲式のみ、の3つの組み合わせが確認できる。湯舟坂2号墳の釘はほかの例よりやや小さいものの、6世紀末から7世紀初頭の年代を

表2 丹後地域とその周辺の鉄釘出土古墳

名称	所在	頭部形態	頭部点数(最低)	全長(cm)	木質	棺材厚(cm)	墳丘(m)	石室形態	築造時期	備考
湯舟坂2号墳	熊野郡	円形鉄頭	48	5.0~8.5	○	0.8~2.0	円(16)	両袖式	TK43	初葬ではない
高山6号墳	竹野郡	円形鉄頭	1	6.0~	×	不明	円(9)	無袖式	TK209	
高山12号墳	竹野郡	円形鉄頭	12	8.0~12.7	○	3.0~3.4	円(18)	左片袖式	TK209	
千原古墳	与謝郡	円形鉄頭(大)、折曲式(小)	19	4.0~13.0	○	不明	方(一辺18)	無袖式か		飛鳥I
奉安塚古墳	天田郡	円形鉄頭(大)、折曲式(小)	3	8.8~19.3	△	不明	不明	無袖式	TK43	
太田森2号墳	天田郡	折曲式	16	5.0~6.9	△	不明	不明	右片袖式か		飛鳥I
弁財1号墳	天田郡	円形鉄頭	3	不明	△	不明	円(25)	両袖式	TK43	
二見谷1号墳	城崎郡	円形鉄頭、折曲式	11	~7.5	○	1.6以上	円(20)	両袖式	TK43	初葬ではない
二見谷4号墳	城崎郡	折曲式	2	6.0~8.0	○	不明	円(18)	両袖式	TK209	

与えられる丹後の釘付式木棺の初現といえる資料で、埋葬後の攪乱が極めて少なく、これらの木棺の姿を類推するための好資料といえる。

しかし、留意すべき点として、1棺に48点もの釘を用いていたと考えられる湯舟坂2号墳に対し、最終埋葬後の盗掘がほぼなかったと考えられる高山12号墳でも13点の釘しか出土していないことがあげられる。高山12号墳の釘が追葬の片づけに伴う混乱でいくらか失われている可能性をさしひいても、湯舟坂2号墳棺の1棺を構成する釘の数は、釘付式木棺の分布の中心である大和、河内の事例と比較してもやや多い。6世紀末から7世紀初頭築造の奈良県宇陀市丹切43号墳では円形鉄頭の釘29点、7世紀中葉の奈良県桜井市中山3号墳では同じく円形鉄頭と折曲式の釘31点がおおよそ1棺分の釘の総数として報告されている。棺の半分のみ検出された7世紀中葉の奈良県高取町常喜院山古墳では、片小口側のみで32点の釘を使用し、小口板と側板は柄組、かつ蓋の構造にまで釘を使用した姿が復元されているため(中野2018)、釘の総数から推測すれば、湯舟坂2号墳の木棺も棺蓋が複雑な構造をとっていた可能性を考慮すべきであろう。

さらに、棺材厚が1cm前後と非常に薄い。6世紀末葉から7世紀初頭にかけては、釘付式木棺が薄く軽い棺になり、分布域も畿内の外に広がる時期にあたる(瀬川2005)。畿内で薄い棺材を用いた円形鉄頭の鉄釘が登場する時期ではあるが、棺材厚は2~4cmのものが多い。湯舟坂2号墳は丹後ではいち早く最新の釘付式木棺を採用しているものの、復元される木棺の姿について現在の畿内の資料と具体的に関連づけることは難しい。しかし、現在までに知られる畿内の資料で、使用する釘の総数を含めた復元検討をおこなうには資料的制約が大きいことも否定できない。むしろ湯舟坂2号墳の木棺は、円形鉄頭の釘を用いた釘付式木棺の初期の良好な復元の1パターンとして評価できるのではないだろうか。

5. 釘付式木棺の被葬者像

丹後地域の後期古墳には石棺がほとんど用いられない。発掘調査でもほぼ棺の痕跡を発見できないことから、釘を使用しない組合式木棺を用いるか、もしくは棺自体を用いなかった可能性があり、棺形態の比較から被葬者像を抽出することは難しい。しかし、確認される埋葬施設の母数からみても釘付式木棺はごく少数で、決して主体的な棺形態とはいえない。事例が少ない一方で、使用される釘は装飾性の高い円形鉄頭の鉄釘が多く、埋葬される古墳は秀でた石室規模をほこり、装飾付大刀や馬具などの豊富な副葬品を持つ古墳であることが多い。それぞれの埋葬施設の形態やほかの副葬品組成に若干の差はあるが、6世紀末から7世紀前葉に築造された地域の有力古墳の、主に追葬棺に畿内と関わりの深い釘付式木棺が採用されている⁽²⁾とみてよい。

6世紀末葉以降の畿外の釘付式木棺の被葬者について、瀬川は地域の有力者層と位置づけている（瀬川 2005）。湯舟坂2号墳は丹後と但馬をつなぐ交通の要衝にある点で評価されており、同じ視点で見れば高山12号墳は高山古墳群中では奥まった場所に位置するが、下方に日本海に抜ける旧街道が通じており、立地としては要地と評価されている（増田 1988）。伯耆谷の古墳群の中で畿内の要素を大いに取り入れた最大の石室をもつ湯舟坂2号墳は、追葬者の代になっても継続して畿内の最新の情報が届いており、地域の中で中心的役割を果たし続けていたと思われるのである。円山川を眼下にする但馬の二見谷1号墳、同4号墳にも同時期に釘付式木棺が用いられているが、二見谷1号墳は刳抜式の家形石棺、同4号墳には組合式家形石棺を持つ。それぞれ初葬棺と考えられ、ここでも初葬者、追葬者の継続した畿内との関係性が感じられる。それぞれの地域の交通を意識した有力古墳の追葬者の中に、畿内との交流を強く感じさせる要素として釘付式木棺が受容されたのではないだろうか。

6. おわりに

湯舟坂2号墳の釘付式木棺の復元をもとに、釘付式木棺としての位置づけと、丹後における釘付式木棺の意味について若干の検討を加えた。湯舟坂2号墳の木棺は、円形鋌頭の釘を使用する初期の例としても良好な復元例であり、湯舟坂2号墳に追葬された人々について検討する上で欠かせない資料といえる。棺の階層性や、釘付式木棺が何らかの職掌を表すものなのかまで踏み込むことはできなかったが、棺の面からも湯舟坂2号墳の先進性、ひいては被葬者像に一步迫ることができれば幸いである。

註

- (1) 高山12号墳の遺物は二次的な移動を受けた際に細片化していたものが多く、特に閉塞石中からは多数の鉄製品の細片がみつまっている（増田 1988）。鉄鏃と鉄釘の身部の判断ができない資料も多く、正確な釘の点数は不明である。
- (2) 奉安塚古墳、千原古墳では初葬棺の可能性もあるが、後世の攪乱もあり断定はできない。

参考文献

- 岡林孝作 2018 『古墳時代棺槨の構造と系譜』 同成社
- 奥村清一郎（編）1983 『湯舟坂2号墳』（京都府久美浜町文化財調査報告第7集）久美浜町教育委員会
- 久美浜町教育委員会 1982 『湯舟坂2号墳—発掘調査の記録—』（京都府久美浜町文化財調査報告第6集）
- 瀬川貴文 2005 「釘付式木棺の受容と展開」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室
- 高松雅文 2006 「群集墳からみた地域支配（上）—但馬地域の分析を中心に—」『古代学研究』175
- 中野咲 2018 「埋葬施設2の木棺について」『常喜院山古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第180冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 兵庫県教育委員会文化課（編）1975 『二見谷古墳群』城崎町教育委員会
- 平井洗史 2021 「古墳時代の和と河内における釘・鏃の消費様相とその背景」『古代学研究』230
- 増田孝彦 1988 「高山古墳群」『京都府遺跡調査概報』第29冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

- 編集 諫早直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2